

母性理念の構造に関する検討 ——母性理念質問紙の分析を通して——

松下姫歌・村上智美

An investigation into the conceptual structure of the idea of motherhood:
Through an analysis of the idea of motherhood questionnaire

Himeka Matsushita and Tomomi Murakami

花沢(1979)は、母性理念とは、女性の母性意識に基づく妊娠・分娩・育児への態度と価値観であるとし、伝統的な母親役割に関する「母性意識」を肯定するか否定するかという態度を測定する母性理念質問紙を作成している。花沢の考えに基づけば、「母性理念」の概念構造は1因子構造で、伝統的な母性意識を否定する態度を測る項目は、肯定する態度を測る方向に対する逆転項目として抽出されると考えられる。本研究で、花沢の母性理念質問紙をもとに、因子分析をおこなったところ、花沢が想定した1因子構造ではなく、第1因子「伝統的母親理念」と第2因子「子依存的母親理念」の2因子からなる構造であることが確かめられた。

キーワード：母性、母性意識、母性理念、母性理念質問紙、因子分析

問題

1. 社会における女性の性役割観の変化

近年、女性の社会進出が著しく、かつては男性の職業とされてきた分野でも女性が活躍するに至っている。間宮(1991)によると、従来の女性は、男尊女卑の思想や男権支配の伝統を持つ社会により、劣った人間とされ、「女や子ども」とひとくくりで「被保護者」の扱いをされてきた。しかし、19世紀末に心理学において個人差の存在が認識されるようになり、男女の差異にも着目されるようになった。性差の理解や、「男女それぞれ、どのような能力において勝るか」という男女の能力の認識に基づき、女子教育に対する自覚が高められ、女性解放運動に至ることとなった。さらに、1970～80年代から、男女雇用機会均等法などに代表される、多くの法律の制定・改正が行われ、男女平等化の動きが活発になり、女性が働きやすい環境が徐々に整うようになった。このような流れを受けて、現在、さまざまな分野で、多くの女性が社会に進出することが可能になっている。

こうした、社会における女性の地位の変化は、社会における女性の性役割観の変化を反映してい

ると考えられる。

性役割とは、性別に基づいて周囲、社会からこうあるべき、こうあってほしいと期待されている役割(山本, 2004)であり、そのような、男として・女として期待される線にそって、心理的行動的に表現される意識や行動(間宮, 1991)である。したがって、社会や文化により変化する、心理学的な性差であるとされている。性役割観は、その社会の構造や規範と密接に結びついており、普段の行動は多かれ少なかれこうした性役割観の制約を受けていると考えられる。

ところが、近年、男性は家族を養い、女性は子を産んで家を守るものである、といった従来の性役割観が変化しつつあるわけである。とはいえ、もちろん、現在も、専業主婦として家庭を守る女性は多く存在する。しかし、女性が仕事を持てる社会になりつつあることで、結婚や出産・育児なども含め、かつてよりも、女性が一個人として主体的に生き方を選ぶ、その選択肢の幅が広がったことは間違いないと考えられる。

このような、社会における女性の性役割観に従来にない幅が生じ、子を産み育てることも、主体的に選ぶ範疇に含まれるようになってきた風潮の中で、女性における母性は、女性自身において、どのように受けとめられているのだろうか。

2. 「母性」の概念について

1) 医学領域における母性の概念

母性という概念が、最初に研究上の概念として確固たる地位を占めたのが医学分野およびその近接領域である(大日向, 1988)。この領域では、母性は、子どもを産み育てるためにそなわった特性(特異な能力)のことであるが、さらにはかかる特性をもった者の総称(津野, 1976; 大日向, 1988)と定義される。また、広義としては女性の性と同義的に解釈されており、狭義としては、母性衛生における母性の定義、「妊娠が始まってから分娩、産褥を経て授乳を終わるまでの女子(保健衛生辞典, 1968)」と同じように、妊娠・分娩・産褥期の女子を対象として、特に子を産み、哺乳しうる能力を持つ女性の身体的特徴およびその状態を意味していると考えられる。

かつては、母性は狭義の概念のもとに用いられていたが、1965年の母子保健法の制定から、妊娠・分娩・産褥期の一時期だけでなく、母である期間や、母になりうる可能性をもつ全期間におよび母性をとらえ、母性概念の対象が妊産婦だけでなく広く女性一般へと拡大した。近年は、広義の概念が採用されつつある。

広義の概念が採用されることにより、母性概念は医学的根拠を越えた価値観も含む方向へ広がっていったとみられる。母性に関して先駆的領域と考えられるこれらの領域においても、女性独自の生殖能力を指すものから一般的な価値観を含むものまで、母性概念は多義的に用いられている。

2) 社会学における母性の概念

次に、社会学の分野においては、母性について、性役割的な意味を強く含ませている定義が見られる。例えば、船橋・堤(1992)の提唱する母性は、母親にのみ固有の役割(母親役割: 子どもを産み育てるうえで、男性にはなく特に女性にのみ固有の部分)遂行の結果表れてくる特性、とされる。母性の概念は、時代や社会的諸条件、国や文化的背景によって異なり、多義的な要素を含んでいる。

今日の母性観念は、これまでの肯定的な面をかなり変化させ、否定的な面も含みつつある。

3) 心理学における母性の概念

①Deutsch(1944)の定義をめぐって

生物学的・社会学的・心理学的側面など多くの分野を包括する、複合的な母性としては、Deutsch(1944)、大日向(1988)、花沢(1992)、上別府(2003)が挙げられる。

母性を考えるうえで、Deutsch(1944)の定義が、包括的で今なおその有効性は秀逸だとされる(大日向、2001)。Deutschの定義は以下の通りである。

「社会的、生理学的、感情的な統一体としての、母の子に対する関係を示すものである。こういう関係は受胎と共に始まり、その後の妊娠、出産、飼養、養育の生理的過程を通じて続く。こういう作用にはすべて、感情的反応がともなうが、これはまだある程度までは、その種族に典型的なもの、あるいは共通のものだが、大部分は個人的な多様性があるものだ。というのは、これは女性個々について、その全人格と切り離せないものだからである。」

このDeutschの定義をふまえ、大日向(1988)、花沢(1992)、上別府(2003)の定義を見ていきたい。

まず、大日向(1988)は、母性を、子どもをもつ女性(母親)が子どもとの関係で発揮しうる育児能力であるとした。そして、母性は絶対的・普遍的なものではなく、社会や文化の変化のもとで、形成され発達変容するとしている。

花沢(1992)は、母性とは児(自分が出産した子に限らない)に対する母親としての関わり、あるいは母親らしい関わり(まだ母親になっていない妊婦や未婚の女性による関わり)に示される女性のパーソナリティの一面と定義している。

上別府(2003)は、母性を、幼い者や弱い者を育むために望まれる性格、一般に子どもが養育者に期待する性格と定義した。これは、母性を初めから願望や期待によるものと定義しておけば、理想化、神話的、幻想的であることとの整合性があるという考えによるものであるが、しかし「母性」を現実の母親と結びつけることは誤りである、とも述べている。

これらの定義に共通する点として、母性が、母(養育者)が子(幼い者や弱い者)に関わる際のものであるととらえている、ということがある。やはり、母性について考えるとき、母と子の間に生じるものであるという考えは切り離すことは難しいことであると考えられる。

相違点としては、花沢はDeutsch同様、女性のパーソナリティの一面としての母性であるとしていること、大日向と上別府は特に社会的な面における母性について述べていることがあげられる。

②花沢(1992)の母性意識と母性理念

花沢(1992)は、これまでの母子関係の研究は、児の発達という視点で、母あるいは母と児との関係を見極めようとしているという、児を中心としたものであるが、母子関係を考えるには母の側からの探求も必要であるとした。そして、従来の心理学は、出産後からの母子関係には強い関心を抱いていながら、その母子関係の基盤となる妊娠期という重要な時期を取り扱ってこなかったとして、新しい見方を考えた。その新しい見方は、主として受胎時からの母としての人間的発達に焦点を当てて、やがて胎児とともに映像の中にとらえていこうというものである。

このような立場で、母への接近を試みようとする心理学の分野を、花沢は「母性心理学」と呼び、

「母性の一般的様相や個人差、ならびにその形成や発達過程を明らかにし、さらにそれが児の発達に及ぼす影響などについての研究を目指す心理学の一分野」と定義している。

花沢は、母性心理学において母性をとらえていこうとする際、母性のうちの意識的な面として、「母性意識」という概念を挙げている。花沢は母性意識を、①女性が母親になる、あるいは母親であることの自覚、②その自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度と価値観、という2つを包括する概念だとしている。そして、①を「母親自覚」、②を「母性理念」と呼んだ。母親自覚は、自覚がいつ現れるか意見が多々あるが、多くの女性は妊娠の経験に伴って生じるとされる。母性理念は、幼児期からの生育史のうちに形成され、個人的諸経験を重ねることによって形成され変容するものとされ、認知されるのは成人期になってからであるとされる。

4) 母性理念質問紙

花沢は、母性意識を測定する際、まず母性理念、すなわち、母親自覚に基づく妊娠・分娩・育児への態度と価値観、についての質問紙作成を試みた。

その際、①母性理念として、母の役割を伝統的な立場で肯定する方向と否定する方向が考えられるが、その両方がとらえられること、②項目内容は高校程度の学力で理解でき、回答形式もできるだけ単純であること、③主に妊産婦や育児中の母親を対象とすることから、比較的短時間で終わり、できるだけ項目数を少なくすること、④比較文化的研究にも使用できるものとし、外国人にも適用可能な内容とすること、⑤少なくとも信頼性(reliability)の高いものであること、に留意した。

そして、花沢自身の過去の研究などで使用した質問紙の項目からの選択や、実際に母親数名から母性理念に関して思い浮かぶ事項をできるだけ多数記述してもらうなどして、約40項目の質問事項を選出し、それを女子大学生75名に予備的に実施、反応分析を行って最終的に27項目での構成になった。この反応分析の詳細については、文献には記載されている様子は見られなかった。加えて、この質問紙は得点化することを目指しては作られていないようである。

この質問紙は、1979年に、女子高生の、幼少期からの生活を反映していると考えられる興味と母性理念との関係を調べることにより母性理念の生成要因の一端を検討する研究において用いられた。この研究では質問紙は得点化されていなかったが、同年の妊婦を対象とした別の研究では得点化して用いられた。採点法は便宜的に、肯定項目も否定項目も「非常にそう思う」と答えた場合に+2点、「そう思う」に+1点、「どちらともいえない」に0点、「ちがう」に-1点、「非常にちがう」に-2点を与えた。そして、肯定項目・否定項目を分けて個人別に得点を算出する、という形をとった。否定項目は、得点がマイナスになった場合、否定項目の内容を否定しているということになる。

以上より、母性理念質問紙が母性のどのような部分を測ることができるものであるのか、その構造について検討する必要があると考えられる。

目的

本研究では、母性理念質問紙の分析を通して、母性理念の構造について検討することを目的とする。具体的には、母性理念質問紙の因子分析を通して、母性理念の概念の構造について検討する。

方法

- 1) **調査対象** 広島大学の女子大学生 122 名。平均年齢は 19.95 歳(SD=1.07 歳, range:18 歳～23 歳)であった。
- 2) **調査日時** 2007 年 6 月, 10 月。
- 3) **手続き** 117 名は集団法での質問紙調査, 5 名は研究Ⅱとともに個別で実施した。質問紙は花沢(1979)の母性理念質問紙 27 項目, 「非常にちがう」～「非常にそう思う」の 5 件法。所要時間は 5 分程度。

結果

調査対象者 122 名における, 母性理念質問紙 27 項目それぞれの回答について, 「非常にちがう」に 1 点, 「ちがう」に 2 点, 「どちらともいえない」に 3 点, 「そう思う」に 4 点, 「非常にそう思う」に 5 点の素点を与えた上で, これらの数値をもとに, 因子分析を行った。

花沢(1979)においては, 伝統的な母親役割に関する「母性意識」を肯定する方向か否定する方向か, といった, 母性意識に対する態度として「母性理念」を考えている。この考えに基づくと, 母性理念は 1 因子構造で, 伝統的な母性意識を否定する態度を測る項目は, 肯定する態度を測る方向に対する逆転項目として抽出されると考えられる。また, もともとのねらいに反して, 概念の性質の違いが因子として複数抽出される場合においても, 相関が想定されるため, 回転方法については, 斜交回転を採択した。

1) 因子分析結果

母性理念質問紙 27 項目のうち, 天井効果が見られた 1 項目,

18. 育児は妻だけでなく, 夫も分担すべき仕事である

および, フロア効果が見られた 1 項目,

3. 妊娠した自分の姿は, 想像するだけでみじめである

の計 2 項目を除外した。

残りの 25 項目について, 重み付けのない最小二乗法による因子分析を行った。固有値の減衰状況, 解釈可能性および累積寄与率等から, 因子数を 2 に指定し, 再度, 因子分析(重み付けのない最小二乗法, プロマックス回転)をおこなった。

その結果, 両因子における因子負荷量が .35 に満たない次の 7 項目を削除した。

5. 赤ちゃんを無事に産むためなら, どんな苦しみも我慢できる
19. わが子の成長を見とどけるために, 長生きをしなければならない
2. 赤ちゃんを産むことができるのは, 女の特権である
6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは, 不公平である
9. 予定していない妊娠の場合は, 人工中絶もやむを得ない

Table 1

母性理念質問紙因子分析結果(回転後)

項目	I	II	共通性
V10 子どもを産んで育てるのは、社会に対する女の務めである	0.763	-0.021	0.561
V11 女は子どもをもつことで、人生の価値を知ることができる	0.694	0.064	0.542
V26 育児に専念したいというのが、女の本音である	0.645	-0.045	0.381
V16 子どもを産んで育てなければ、女に生まれた甲斐がない	0.639	-0.015	0.397
V13 育児は女に向いている仕事であるから、するのが自然である	0.589	0.051	0.387
V23 子どもを育てるのは、生みの母が最良である	0.573	-0.196	0.225
V8 どんなことをしても、赤ちゃんは母乳で育てるべきである	0.519	-0.149	0.193
V20 母親がわが子を自分の一部だと感じるのとは当然である	0.450	0.225	0.381
V7 女は子どもを産むことで、自分が生きた証拠を残すことができる	0.374	0.089	0.190
V1 妊娠は、女にとってすばらしい出来事である	0.355	0.161	0.224
V17 子どもがいることで、家庭生活はより楽になる	0.064	0.653	0.484
V25 わが子の存在を感じるだけで、毎日の生活にはりが出る	0.041	0.599	0.391
V27 母親が子どもの成長を生き甲斐にするというのは間違っている	0.003	-0.575	0.329
V24 育児から解放される時に、人間らしい自由な生活ができる	0.270	-0.538	0.179
V12 結婚生活を楽しむためには、子どもをつくらないほうがよい	0.037	-0.472	0.202
V14 子どもを産んで育てることは、自分自身の成長につながる	0.223	0.369	0.290

因子間相関

0.633

(因子抽出法:重みなし最小二乗法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法)

15. わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである

4. 赤ちゃんを産んではじめて、子どものかわいさがわかる

および、両因子とも負荷量が.35以上であった1項目を削除した。

21. 育児に追われていると、若さが早く失われる

以上、計8項目を削除した残りの17項目で、再度、同様の因子分析をおこなった。その結果、両因子とも負荷量が.35に満たなかった次の1項目を削除し、16項目でさらに同様の因子分析をおこなった。

22. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる

その結果、第1因子10項目、第2因子6項目からなる2因子が抽出された(Table 1)。

第1因子は、昔から世間一般で良いとされてきた女性像・母性像を肯定している項目が抽出されていると考えられるため、「伝統的母親理念」因子と呼ぶことにする。

第2因子は、子育てに生きがいや楽しさを見いだし、ひいては自分の成長を見い出すといったように、子どもを自己の支えとすることを肯定する方向性の項目が抽出されていると考えられる。よ

って、第2因子を「子依存的母親理念」因子と呼ぶことにする。

信頼性の検討として、 α 係数を算出したところ、第1因子に高い負荷を持つ10項目では.827、第2因子に高い負荷を持つ6項目(項目12・24・27は逆転処理した)では.697であった。これより、第1因子では非常に高い内的一貫性が、第2因子では高い内的一貫性が確認された。

考察

1. 母性理念の概念の構造について

上述した通り、花沢(1979)においては、母性理念とは、女性が母親になる、あるいは母親であることにまつわる母性意識に基づく、妊娠・分娩・育児への態度と価値観であり、より具体的に言えば、伝統的な母親役割に関する「母性意識」を肯定する方向か否定する方向か、というような、母性意識に対する態度として「母性理念」を考えている。

この考えに基づくと、「母性理念」の概念構造は1因子構造で、伝統的な母性意識を否定する態度を測る項目は、肯定する態度を測る方向に対する逆転項目として抽出されると考えられる。

今回、花沢の母性理念質問紙27項目をもとに、因子分析をおこなったところ、第1因子「伝統的母親理念」: 伝統的な母性像を肯定し、妊娠・分娩・育児が女性の本質であるとする因子、第2因子「子依存的母親理念」: 子育てに生きがいや楽しさを見いだし、ひいては自分の成長を見い出すというように、子どもを個としての自己の支えとすることを肯定する因子、の2因子が抽出された。

したがって、母性理念は、花沢が想定していた1因子構造ではなく、伝統的な母親役割を、女性本来の本質とし受容する面と、個である自分の支えとして受容する面の2因子構造からなると考えられる。つまり、母性理念は、伝統的な母性役割を受容するか否かという2タイプのあり方だけでなく、伝統的な母性役割を、女性本来のものとして受容するか否か、個の支えとして受容するか否かの組み合わせによって、①母性役割を女性本来のものとしても、個の支えとしても受容するタイプ、②女性本来のものとして受容するが、個の支えとして見ないタイプ、③女性本来のものとはみなさないが、個の支えとして受容するタイプ、④どちらも受容しないタイプ、の4タイプを見出すことが可能になると考えられる。

2. 因子分析によって削除された項目について

但し、因子分析の結果、花沢の質問紙には含まれていた項目が、最終的に11項目削除されている。これらの項目の指す内容は、今回抽出された母性理念の概念と質的に異なることが考えられる。花沢の質問紙によって捉えられる母性理念概念と今回抽出された概念の質の差異について検討する。

1) 天井効果・フロア効果が見られた2項目について

これらは、いわゆる弁別力のない項目ということになる。「18. 育児は妻だけでなく、夫も分担すべき仕事である」は元々は逆転項目であるが、天井効果が見られ、今回の被調査者の多くが、育児は夫も分担して行うのが当然という考えを持っていると考えられる。従来の母性理念とは異なる点といえる。

フロア効果が見られた項目の「3. 妊娠した自分の姿は、想像するだけでみじめである」も逆転項

目であり、これは従来の母性理念を支持する結果であるが、極端な表現であったために弁別力が得られなかった可能性が考えられる。

2) 因子負荷量が両因子に高く負荷したために削除された1項目

これは、両因子とも負荷量が0.35以上で除外され、抽出された2因子と共通性を持つ項目である。

項目「21. 育児に追われていると、若さが早く失われる」は、母性を女性の本質として受け容れるか、個の支えとして受け容れるかを問わず、普遍的な現実あるいは実感として捉えられている側面であると考えられる。

3) 因子負荷量が低いため除外された8項目について

両因子とも負荷量が0.35以下のため除外され、両因子とも質の異なる概念、あるいは、一定の方向性をとらない、項目理解の個人差が生じると考えられる項目についてである。

項目「9. 予定していない妊娠の場合は、人工中絶もやむを得ない」、「15. わが子を他人にあずけても、自分の仕事を続けるべきである」は、もともと逆転項目であるが、逆転項目としても拾われなかった。すなわち、伝統的母性を本質とする立場においても、個の支えとする立場においても、性質が異なると感じられている側面を示していると考えられる。両因子は、少し角度は異なるが、母性を肯定しており、項目9・項目15は母性を否定する、母性の対極にあるあり方と感じられているわけではない。母性とは別の、例えば、自分の都合を優先する面や、逆に、自分の望みとは異なり、妊娠や仕事を強いられてしまう立場の辛さを表すのかもしれない、あるいはこうした、さまざまなものを読みとりうる項目であるために、一定の方向性を拾う項目と成り得なかった可能性もある。

項目「5. 赤ちゃんを無事に産むためなら、どんな苦しみも我慢できる」と「22. わが子のためなら、自分を犠牲にすることができる」といった自己犠牲の側面や、項目「4. 赤ちゃんを産んで初めて、子どものかわいさがわかる」、項目「2. 赤ちゃんを産むことができるのは、女の特権である」、項目「6. 女だけが妊娠やお産の苦勞をするのは、不公平である」といった、出産の特権と苦勞に関する概念については、今回の2因子とは一定の方向性をもった関係がなく、個人差があることが示唆される。

項目「19. わが子の成長を見とどけるために、長生きをしなければならない」は、女子大学生を対象にした今回のような場合には、まだリアリティを感じにくく、自分の中に位置づけにくい項目であった可能性が考えられる。

4) 総合考察

もともと、花側においては、母性理念は、伝統的な母性意識を肯定するか否定するかという概念として考えられていたが、今回の結果は、そうした伝統的な母性意識を肯定するか否定するという一次元尺度ではなく、伝統的母性理念の中の質の異なる2つの意識である、伝統的な母親役割を①女性本来の本質とし受容する面と、②個である自分の支えとして受容する面とが、互いに相反する方向ではなく、2因子構造からなることが明らかになった。

また、削除された項目から、出産や育児のために過度に自己犠牲を払う「子ども至上主義」や「出産の特権と苦勞」、あるいは、「自分本位なあり方」、といった側面は、今回抽出された2因子とは関係を見出せず、むしろ個人差が大きいことが示唆される。もとの花沢の質問紙に盛り込まれていた、

花沢の「母性理念」のうち、母親役割と自分の価値観の間のバランスがとれていないと考えられる項目は、弁別力のある項目としては拾われなかったと推測される。

引用文献

- 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (1999). ジェンダーの心理学 ミネルヴァ書房
- 土肥伊都子 (1995). ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ—母性・父性との因果分析を加えて— 社会心理学研究 第11巻第2号 84-93.
- 船橋恵子・堤マサエ (1992). 母性の社会学 サイエンス社
- 花沢成一 (1992). 母性心理学 医学書院
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子(編) (1995). 日本のフェミニズム5 母性 岩波書店
- 伊藤裕子 (1978). 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究 第26巻 第1号 1-11.
- 伊藤裕子 (1997). 青年期における性役割観の形成 風間書房
- 鎌原雅彦・宮下一博・大野木裕明・中澤 潤(編) (1998). 心理学マニュアル 質問紙法 北大路書房
- 河合隼雄 (1976). 母性社会日本の病理 中央公論社
- 久世恵美子・木村美加・松下姫歌 (2006). 初産婦の周産期における母性感情のプロセスとその個人差 第37回日本看護学会論文集 ——母性看護—— 173-175.
- 間宮 武 (1991). 男と女—性差心理学への招待 小学館
- 町沢静夫 (1990). 性と性格 臨床心理学大系 第2巻 パーソナリティ 金子書房 211-226.
- 松尾恒子・高石恭子 (2005). 現代人と母性 新曜社
- 宮本忠雄(監)油井邦雄(編) (1995). 女性性の病理と変容—現代社会における女性性とその逸脱構造— 新興医学出版社
- 中岡泰子 (2005). 女子大生の「自分らしさ」と性役割観 四国大学紀要 第24号 53-60.
- 大日向雅美 (1988). 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美 (2001). 母性研究の課題—心理学の研究は社会的要請にいかに応えるべきか— 教育心理学年報 第40集 146-156.
- 大日向雅美 (2002). 母性愛神話とのたたかい 草土文化
- 関根 聰 (2005). 女性大学生における性役割意識 大阪女学院短期大学紀要 第35号 75-84.
- 宇井美代子 (2001). ジェンダー・性役割 堀洋道(監)山本真理子(編) 心理測定尺度1 サイエンス社 138-172.
- 牛島定信 (2003). 母性を再考する 精神分析研究 第47巻 第1号 42-44.
- 山本雅代 (2004). 青年期における性役割タイプと適応について 仁愛大学研究紀要 第3号 39-46.
- 吉川武彦 (1993). こころが危ない—失われゆく母性への標— 関西看護出版